

待降節第一主日

「待望に生きたザカリヤ」

民数記4：21―28

ルカ1：1―25

(1)

この朝も、みなさまの上にキリストの恵みが豊かにありますように祈ります。

ところで、商店街の垂れ幕に、「ハッピー・クリスマス」とあっても、いまだ驚くことはありません。世俗的なクリスマスに嫌気をさして、クリスマスを祝わない教会もあると言います。反対に、この時とばかり盛大な祝いをする教会もあります。

アドベント第一礼拝を迎え、今朝は、ルカ福音書の1章に注視します。

「ルカ福音書」を編集したのは、テアスポ(離散)のユダヤ人「ルカ」です。元はシリアのアンテオケアの出身者です。ローマの市民権を持っていました。彼の職業は医者です。

「ルカ」はギリシャ名ですが、ニック・ネームは「ルーカノス」・「ルーカス」。実は、四人の福音書史家の内、「ルカ」だけが主イエスとお目にかかっていません。彼は使徒パウロを通してキリスト者となりました。

ルカは、いかにも医者らしく、福音書を順序正しく、正確に記述しました。「すべてのことを初めから綿密に調べあげて、順序を立てて書いて差し上げた」(1：2)と言います。イエス・キリストの誕生・十字架・復活・昇天までの順序を正しく、しかも、正確に記述

したのが「ルカ福音書」です。

ルカ福音書には、クリスマスに際して、二人の女性が登場します。当時は女性の証言を重んじない時代でしたが、「バプテスマのヨハネの母・エリサベツ」と、「イエスの母・マリヤ」の二人が、奇しくもキリスト降誕を証し、登場します。

ルカ福音書には、もう一つ注目すべき点があります。クリスマスを中心に若者が見当りません。スポット・ライトを浴びたのは、何と老人と老女の二人です。不思議なことではないでしょうか。

マタイ福音書では、東方から訪れた博士たち、おそらくベルシャヤ地方から訪れた博士たちが登場します。しかし、ルカ福音書においては、「ザカリヤ」・「シメオン」・「アンナ」という高齢者たちがキリスト降誕の主役を占めています。

老人シメオンは、「正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいました」。「アンナ」は、老いていながらも、「エルサレムの救いを待ち望んでいるすべての人々に語り聞かせた」とあります。何と84歳のアンナが、救い主を指し示したというのです。おそらく、これは福音書に記されてある最初の福音伝道者です。

イエス・キリストの降誕に際して、二人の老人を配置していることに、神の深い意図があると思われれます。浮き沈みの激しいこの世を、長らく生きて来たのです。喜びも、悲しみも、

酸いも甘いも、余すところなく体験してきた二人です。その老いた二人がキリスト降誕に際して、中心的な役割を演じた見る視点には、ルカ独自のものといえます。

(2)

ところで、ルカ福音書では救い主が誕生する以前に、洗礼者ヨハネの両親が登場します。「洗礼者ヨハネ」の父親は、祭司「ザカリヤ」、母親の名はエリサベツ、二人とも祭司の家系です。しかし、名のある祭司の家系ではなく、むしろ、無名に近いと思われれます。

ひと昔前、「人生わずか50年」と言われました。「ザカリヤ」は当時、おそろしく、人生半ばを過ぎていたようです。民数記には、祭司となれる者の年齢制限が記されています。「レビ族の30歳から50歳までの男子が会見の天幕で務めを果たさなければならぬ」(民数記4:29)。(おそろしく、ザカリヤは、退職間際の祭司であったのでしよう。

ところで、この夫婦は、深刻な問題をかかえています。妻のエリサベツが不妊の胎であり、そのため周囲の者たちからはずかしめを受けてきたのです。しかし、今日の医学的な見解では、不妊の原因の40%は、男性の側にあると言われます。これ以上は申しませぬ。

主の掟と定めとを忠実に守ってきた二人でありながら、どうして・・・と頭を傾げたくありません。不妊の胎は、神から祝福を取り去られたものと見なされていました。ユダヤ社

会では家系を大切にします。世継ぎがなければ家系が断絶してしまいます。このことは私たちが考える以上に深刻な問題でした。

わが子を授かりたいとの願いがあっても、いまや二人は老いた身であります。

ところが、祭司ザカリヤに、千載一遇のチャンスが巡ってきました。祭司たちは24のグループに分けられています。しかも、半年に一度だけ神殿当番となる定めです。しかし、グループ一つは、約800人の祭司で構成されていたのです。これでは神殿当番に当たるチャンスはめったにありません。

ところが、クジを引くと、ザカリヤに神殿当番が当たったのです。それで、彼は神殿の中で香を焚く務めを果たしていました。その時です、予期せぬことが起こりました。御使いガブリエルが現われて、「こわがることはない。ザカリヤ。あなたの願いが聞かれたのです。あなたの妻エリサベツは男の子を産みます。名をヨハネとつけなさい。その子はあなたにとって喜びとなり楽しみとなり、多くの人もその誕生を喜びます」(1:13)と告げられました。ところが、当のザカリヤは喜んだかといえば、むしろ、「不安を覚え、恐怖に襲われ」(1:11)、恐る恐る御使いガブリエルに尋ねました。「私は何によってそれを知ることができましょうか。私ももう年寄りですし、妻も年をとっております」(1:8)。わが子が与えられるこの約束をいただいた当のザカリヤはたじろぎました。

しかし、考えてみてください。イスラエルの歴史を振り返れば、「アブラハム」と「サラ」夫妻に長らく子が与えられていません。②「イサク」と「リベカ」夫妻もまた、長い間、不妊で悩んでいます。サムソンの母もそうでした。預言者サムエルの「母ハンナ」も、同じく不妊の身でありました。③サムエル一章。こうした過去の事実を、ザカリヤはよく知っていたはずだ。

御使いガブリエルにより、子が与えられると言われて、にわかに受け止めることができなかったのは、柔軟性の欠けた思考停止によるのか、それとも彼自身の信仰に、何か問題があったのか、いずれにしても、ザカリヤは、にわかには信じることができませんでした。

主は言われます。「わたしが出産に臨ませて、産ませないことがあるでしょうか。主は言われる。わたしは産ませる者なのに、胎を閉ざすでしょうか」(イザヤ66:9)。

「時が来れば成就するというわたしの言葉を信じなかった」「このザカリヤの不信により、彼はとがめを身に受け、「おい」口を開きされた者」と言われました。もはや祭司の務めをはたせませぬ。

しかし、人は、望みが絶たれた時こそ、神の約束の御言を真剣に聴き始めます。

祭司ザカリヤは、御使いの言葉をにわかには信じるこゝが出来ず、「と」うしたら、それを確かめることができるのでしょうか」と戸惑うばかりの彼に、主なるお方は、約束された

ことを彼の身に実現しようとなさいます。実に不思議なことだ。

(3)

御使いガブリエルから、「あなたの祈りが聞き入れられたのです」と言われている「あなたの祈り」とは、他なりません。ザカリヤとエリザベツ夫妻の抱えていた祈りです、それが実現する時が来たのに、ザカリヤは不安を覚え・恐怖に襲われました。

長いこと、わが子の授かることを必死に祈ってきた夫妻です、今やその願いが聞かれようとしているー、にもかかわらず、彼は不安と恐れに襲われたのです、どうしたことなのでしょう。いくら長年祈っていても、聞かれないことはあると、はじめから諦観していたのでしょうか。聞かれるか、聞かれないかはわからないが、それでも、祈らないよりましであるという程度のことであつたのでしょうか。

干ばつが続いた南米地方の教会で、「雨を降らせてください」と特別祈禱会がもたれました。祈禱会が終わった後、一人の子供が傘をさして外に出たのです。まわりの大人はどうしたのと尋ねたのです。するとその子は笑いながら、「だって、さっき雨が降りますようにと祈ったんですよ」と言っています。

使徒の働き12章にも同じようなことが記されています。ペテロさんが獄中から解放されますようにと必死に祈っていたところ、ペテロさんが、獄中から救出されたという知らせ

を應對に出たロタという女中が知らせる、周囲の人々は信じません。むしろ彼女は気が狂っていると言いました。わたしたちの思いも、願ひもはるかに超えて、素晴らしき御業をなすことが信じられなくなりました。(H 263: NO)。

主なる神の語りわたした御言は約束が伴っていません。御使いは、「御言は時が来れば、必ず実現する」(1:1: NO)とザカリヤに言われました。また、1章45節では、「主によって語りわたしたことは必ず実現すると信じきった人は、何と辛いことでしょうか」とも言われました。確かに、わたしたちは、聖書一、神の御言を日々読んでいます。しかし、約束を伴う御言ですから、必ず、叶えてくださると思っただけで読んでいますか。

御使いガブリエルから、「あなたの祈りが聞き入れられました」と告げられたザカリヤは、恐れ不安を抱いた不信の故に、永遠の沈黙を強いられました。

詩篇46篇10節には、「静まって、わたしこそ神であることを知れ」との御言があります。「静まって」「力を捨てて」「手足を動かさず」「口を閉じて」「口を閉じて」「口を閉じて」「口を閉じて」など、いろいろな訳が可能です。

御言を本心から信じ受けとめようと思つる者は、「静まる」「力を抜く」「力を捨てる」「むやみに動くことをやめる」「沈黙すること」が求められています。

1-2月の頃になると、きまつて思ひ出します。

とがあります。東京杉並の神学校で最終学年を迎えていた冬休みのことです。「順境のときは喜べ、逆境の時は考えよ」とは、伝道者の言葉ですが、その頃といえば、一番つらい、一番落ち込んでいた時でした。自信を失い、まさに沈黙を強いられた時でありました。

「ハルトブルーの冬空を背景に、全ての葉を落とし終わり、今や裸となった冬木立のイチヨウの樹が、部屋のガラス窓から見えます。それを眺めているのが一つの慰めでした。朝に夕に窓から外を眺めやりながら、それでも、一人部屋にこもって、ローマ書を原書で通読することを示されました。辞書を引き引き、十分ではありませんでしたが、それでも何とか16日間で読み終えることができました。校舎の中はガラーンとして、わたし一人です。仲間の神学生たちは、正月に備えて郷里に帰りました。

そうした時、示されたのが、ローマ4章17節以下の御言葉でした。「彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るものようにお呼びになる方の御前で、・・・彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだに死んだと同然であることと、サラの胎の死んでいることを認めても、その信仰は弱まりませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなつて、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があること

とを堅く信じました。だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。」

「望みえないときに望みを抱いて信じた」とあります。さらに、「彼はこの神、即ち死人を生かして、無から有を呼び出される神を信じた」とあるではありませんか。」彼は、神の約束を不信仰の故に疑うようなことをせず、かえって、神に栄光を帰し、「……」とこわれてくる御言「、上から頭を叩かれて、……」を深く噛みしめることができたなら、いかな時でした。

「お」とされた祭司ザカリヤの根本の原因は、「わたしは信じていなかったからです。わたしのことは、その時がくれば実現します。」(1:1-2)、「……」彼の全ての問題がありました。

1章45節に、「妻」「エリサベツ」は、主イエスの母マリアのもとを訪ねてこう申しておられます。「主によって語られたことは必ず実現すると信じました人は、何と幸いなことでしょうか。」。牧師も信徒も、主によって語られた言葉は必ず実現すると信じ、「……」と応答しなければなりません。

祭司ザカリヤの「……」と申したら、それを確かめることができなかったのでしょうか「と問い返すばかりならば、わたしたちもいすれ、福音を語る口が封じられて、失語症におちいるかもしれない。」

周東のぞみキリスト教会は、来春から、祈りと忍耐をこらえられるかもしれない。しか

し、以前にも増して、しっかりと足腰を据えて、前進する群れとなるように信じていきます。

ザカリヤが、「御言は時が来れば、必ず実現する」との御言を受け止めたのは神殿の中ではありません。彼の口が閉ざされた時であります。神の御前に沈黙する時、人は真の服従に促されます。アブラハムが息子イサクを献げた時もそうでした。彼は終始沈黙を強いられました。

「主は、人中で私の恥を取り除こうと心にかかれ、今、私をこのようにしてくださいます。」とエリサベツは御名を崇めました。

【祈ります】、
天のお父さま、あなたのお語りになられた御言には、すべて約束が伴っています。読むだけでなく、聴くだけでもなく、約束を伴う御言と信じて読むものでありますように、

主イエスの名によって祈ります。」。……」